

「フクロウ対ムササビ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

フクロウの抱卵期間はおよそ1か月である。最後の卵を産み終わると、フクロウのメスは、食べ物を捕獲（またはオスにもらう）時以外は、ほとんど24時間抱卵を続ける。4月とは言え、北軽井沢では氷点下になる晩もある。母親フクロウにとっては、抱卵を続けることが最も重要な仕事なのだ。



夜間の「外出」はせいぜい数分～十数分の時が多い。ところがこの日は、30分たっても戻らなかった。何かあった可能性がある。



巣箱口カメラの過去の画像を調べて、原因がわかった。ムササビである。ムササビは冬と夏の2回営巣するのだが、今の時期は繁殖期ではない。しかし、この

巣箱では過去に子育てを始めたムササビもいるので、次の営巣候補地として「偵察」に来たにちがいない。ムササビは巣箱口まで飛んできたが、フクロウのほうは事前に気配を察知したのか、ムササビが来る前に巣から出ていた。



幸い、ムササビはフクロウの匂いと卵の存在に気づいて、巣箱を覗いただけで、中には入らなかった。自然界の順位では、猛禽のフクロウのほうが地位は上である。フクロウは若いムササビを襲うこともあるという。数十分後に、母親フクロウは戻ってきたが、かなり警戒している様子だった。普通は1分以内に巣箱に入るのだが、この時は数分間、巣箱口でキョロキョロしながら周囲を警戒していた。



巣箱に入ってから、しきりに巣箱口のほうを向いてキョロキョロしている。もしかすると、まだ近くにムササビがいて、その気配を感じていたのかも知れない。孵化まではあと1週間ほどと予想している。どうか、ムササビとの「直接対決」は避けてほしい。